

〔論文〕

ライブメディアを活用したブライダルサービスの実践と考察

江戸川大学メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科 谷川 正 継

〈あらまし〉 2008年のアメリカ大統領選で利用されて知名度を上げた、ライブストリーミングサービス「USTREAM」は、2010年1月にソフトバンクが出資することで、日本における取り組みが本格化された。これ以降有名アーティストのコンサートや政党の代表選などがネット中継され、日本においてもライブストリーミングが身近になってきている。ライブストリーミングは、多くの場合はTwitterやFacebookといったソーシャルメディアネットワークと連携しており、世界中のユーザーの「今」を共有する「ライブメディア」として一体化している。本稿では、ライブメディアを活用した事業の一例としてブライダル中継サービスを提案し、実践結果も踏まえて考察する。

キーワード:ライブストリーミング、ライブメディア、ソーシャルメディア、USTREAM、Twitter、ブライダル

1. 現代日本のブライダルにおける課題

ライブメディアを活用したブライダル中継サービスによって、結婚式・披露宴における以下の課題を解消、改善することができると思う。

1.1 参加できない人への対応

時間や距離、健康状態など、様々な理由で式に参加したいのにできない人がいる。そういった人たちにもインターネット越しとはいえ参加できる方法を提供できる。

例えば重病で病院から出ることができない入院患者であっても、病院内にインターネットに接続できる環境さえ用意できれば、iPadなどの小型端末で簡単かつ安価に視聴することができる。

中継内容を録画する機能もあるので、リアルタイムに中継を視聴できなかった人でも自分の空いた時間に視聴することができる。

1.2 招待客に関する費用的問題

結婚式・披露宴は、一般的には多くの人と共に催したいと思われるが、費用の問題もあり実際には主催者の経済力に応じて多くの制限が発生する。

例えば、呼べば必ず参加してくれるだろう知人であっても、遠方に居住している場合は多額の交通費が発生し、それをどちらが負担するにしても招待すべきか否か、悩むことになる。ブライダル中継サービスを利用することで、ネットによる参加という双方に負担の少ない選択肢を提供することができる。

1.3 参加者との交流

直接式場に参加している人とは、式の流れの中で一言二言言葉を交わす機会があるが、式場に来られなかった人とはリアルタイムで交流を持つことはない。一部の人の想いは祝電という形で紹介されているが、一方向的なコメントであり形式的なことも多い。ライブメディアを活用することで、式の進行に合わせてリアルタイムな感動を伝えることができる。

1.4 地域の特性

筆者の出身である九州などでは、大学進学や就職の際に東京や大阪などの大都市圏に移動する事例が多い。そのため新郎・新婦の現在の活動拠点

で結婚式・披露宴を行うのか、実家で行うのかといった悩みを持つ場合が多い。どちらか選択をするということは、他方を切り捨てることになるのだが、ブライダル中継サービスを利用し、後述する「遠隔会場」などを設定することで、その不公平感を和らげることができる。

2. ブライダル中継の実践

筆者自身の披露宴において、江戸川大学学術情報部の宮崎顕嗣氏の協力のもとブライダル中継の実験を行った。

2.1 ライブストリーミングサービス

ブライダル中継には USTREAM を使用する。ニコニコ生放送などもリアルタイムに感動を共有するという意味では優れたサービスではあるが、費用や 30 分の時間制限などの問題、配信の自由度などからブライダル中継には USTREAM が適していると思われる。

表1 表 1 ライブストリーミングの比較

	USTREAM	ニコニコ生放送
時間制限	無し	有り(基本 30 分)
コメント	映像の右側	映像の上
コスト	無料	有料
解像度	変更可	固定
ビットレート	変更可	固定

2.2 コメント機能

USTREAM には、動画にコメントを付ける機能として「ソーシャルストリーム」と「チャット」というタブが用意されている。「ソーシャルストリーム」は Facebook や Twitter, mixi といった SNS (ソーシャルネットワークシステム) と連携し、コメントをそれらソーシャルネットワークへの投稿と連動することができるのに対し、「チャット」は他のネットワークとは連動していないが、コメントの表示のレスポンスが早いという特徴がある。

今回は両方を有効にした。

2.3 ネット回線

WiMax の WiFi ルーター 2 台を使用した。最も優先度の高い「会場の映像をサーバーへ送出するノート PC」を WiFi ルーター 1 台と接続させ、モニター用 iPad や遠隔会場からの映像表示用のノート PC はもう 1 台の WiFi ルーターに接続させて、安定度を確保した。

2.4 ビデオカメラ

撮影にはデジタル一眼カメラである Lumix DMC-GH1 のコンポジットからの出力を利用した。これは「シネ Ust」と呼ばれる手法で、デジタル一眼のレンズの表現力によって、映画風の画質を表現するためである。今回はコンポジット出力をアナログ/デジタル変換 (ADVC110) で DV に変換してノート PC に入力した。

2.5 送出力ノート PC

DV 端子を持つ hp2710p を使用した。今回はタイトルなどを表示させるために USTREAM 専用のアプリである USTREAM PRODUCER Pro を使用した。

2.6 遠隔会場表示用ノート PC

外部出力で大型液晶テレビに接続し、遠隔会場の映像とコメントを表示する。

2.7 モニター用 iPad

披露宴会場からの映像が正常に送られているか、また映像に対するコメントを新郎・新婦が閲覧するために iPad を使用した。お色直しなどで会場にいない時には、より小さく持ち運びのしやすい iPhone なども使用した。

2.8 IC レコーダー

会場の音声を入力するために指向性を持つ IC レコーダーを使用し、オーディオケーブルでノー

ト PC へ入力した。

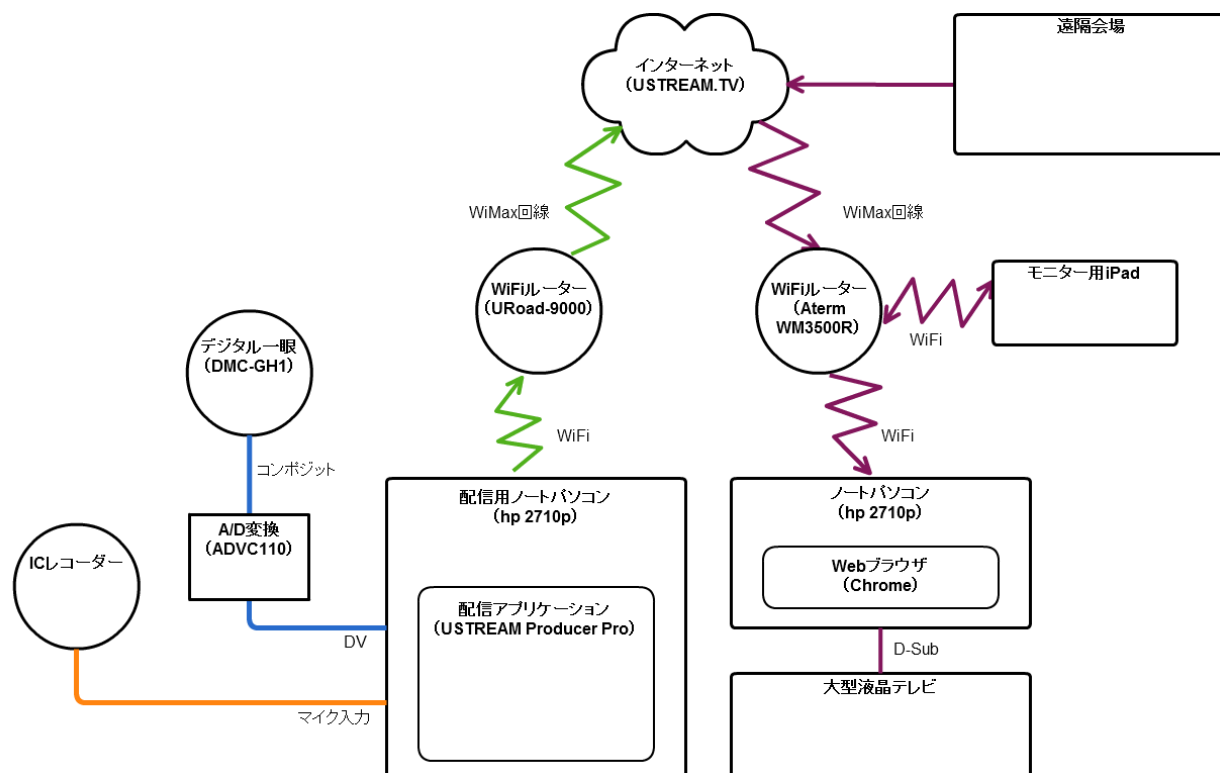


図1 実験システムの概要

3. 結果と考察

3.1 映像の中継について

今回はデジタル一眼である DMC-GH1 をほぼ固定カメラとして会場に設置し、最低限必要な時のみカメラの向きを修正した。これは作業に必要な人員が足りなかったためであり、本来は式の内容を DVD 等に記録するためのカメラの映像などを使用すべきであろう。

画質を高めるためにデジタル一眼を使用したのが、コンポジットで出力した時点で解像度は NTSC 相当になってしまった。HDMI など高解像度で出力できるカメラとその信号を入力できる機材・設定でより高画質で配信できるようにしておくべきだと思われる。

リアルタイムでブライダル中継を視聴したのは合計で 103 名であった。

3.2 音声について

カメラとマイクをほぼ固定で運用するために、指向性のある IC レコーダーを利用したが、会場

内で取るべき音声の発生場所がかなり離れていたために、今回使用したレコーダーでは明瞭に録れていない部分もあった。本来は会場の PA から音声を回した方が良いと思われる。

ただし、今回はマイクを使わずに歌やピアノを使う場面もあり、PA を通さない音源も多かった。より指向性の高い本格的なガンマイクか、必要な個所にあらかじめマイクを設置しておくなどの準備が必要であったと思われる。

3.3 ソーシャルストリーミングについて

あらかじめ告知していた URL と異なるものに配信してしまうというミスがあったが、ソーシャルストリーミング上での自主的な視聴者間のやり取りで正しい URL まで誘導するという事態があった。新郎もしくは新婦と関係している以外は共通点を持たない者同士が協力し合う様子は、ソーシャルメディア上での善意の発露として典型的といえる。

披露宴における一挙手一投足にリアルタイム

に反応があり、見ている側も楽しかったが、特に学生同士でコメントが盛り上がっていた。

あまりに盛り上がりすぎたためか、学生は自主的に「チャット」の方へ移動していた。これはソーシャルストリームで Facebook や Twitter と連携した状態で短時間に多くのコメントを投稿すると、自分のコメントをフォローしている人のタイムラインが自分のコメントばかりで埋まってしまう、不便を感じた人からフォローを辞められてしまう可能性があるためと思われる。

現在ニュージーランドに住んでいる元教え子からも「ご結婚おめでとうございます。ニュージーランドに居ながら、こうして結婚式の中継を Ustream で見られるなんて感激です!」といったコメントがあった。近年傾向としては日本における国際結婚も増えており、このように国を超えてコミュニケーションが取れる方法に対する需要も増してくるものと予想される。

ソーシャルストリーム上で、参加者の一人が新郎・新婦の地元出身の有名人に Twitter でコメントを送り、同郷人へのお祝いコメントをお願いするという事例があった。依頼が来たからといってもちろん有名人が反応してくれるわけではないが、たまたま気が向いて反応してくれることは Twitter 上では時折聞く。前もってお願いしておけば、対応してくれる有名人もいるはずであり、祝電に代わる新たな披露宴のイベントとして有力だと感じた。

3.4 遠隔会場について

今回は知人の協力により、関東の2カ所に「遠隔会場」が設けられ、知人が集まってブライダル中継を視聴してくれた。そのうちの一つでは、中継を視聴している様子を Web カメラで撮影し、同じく USTREAM を使って限定配信し、それを本会場の一角で大型液晶テレビに映し出した。

こちらがカメラに向かって手を振ると、テレビ画面の先の遠隔会場参加者が手を振るという様を見て、本会場では大いに盛り上がった。本会場に

いた参加者からすると、こういったインタラクティブなやり取りが発生して初めて、自分たちの様子が世界中に中継されているという実感が湧いてきたようであり、それ以降カメラの前でパフォーマンスをする人などが現れた。

遠隔会場の様子やソーシャルストリームを大型液晶テレビに映していたが、本会場の参加者としては意識しない限りあまり視界に入っていないようだった。少なくともソーシャルストリーミングについてはもっと読みやすい場所に表示させた方が良いと思われる。プロジェクターなどを使って会場の壁などに映し出す方法が考えられる。

今回は知人の家で集まってもらったが、事業として展開する場合は、ネット回線やプロジェクターなどの設備の整った提携店舗を用意し、そこで参加料を取る代わりに快適な視聴空間を作る必要があると思われる。

4. まとめ

ソーシャルストリームを利用することで、知り合いの知り合いといった自分が直接知らない人も視聴する可能性がある。そのこと自体はソーシャルネットワークを利用する上で面白いところでもあるが、プライバシーの問題などを考えると、デフォルトの設定では、ソーシャルストリームは無効にして、チャットのみでコミュニケーションを取るというのも考慮に値すると思われる。またチャットの場合は反応が早いため、インタラクティブなやり取りをする場合にも適している。

ソーシャルストリーム上での意見で、結婚式などのイベント映像は、ライブ中継と録画ではまったく参加感が異なるというものがある。録画は自分が観ていても観ていなくても結果は何も変わらないのに対し、ライブ中継の場合は誰もまだ何が起こるか知らない上に、自分や誰かのコメントによって未来が変わるかもしれないという感覚がある。これが視聴しているイベントに自分が参加しているかのような感覚を起こさせているのではないかとと思われる。こういったライブ中継の成功の

ためには、ソーシャルストリームでの適度な発言量とそれによって会場に何かしらの変化を起こすことが必要だと思われる。

似たようなものに、結婚式の写真集は見るけど DVD はあまり見たくない、という意見もある。当事者とその身内を除くと、後で録画映像をしっかりと見たい人は少ないように思われる。これは、編集されていない生の映像を見せられることに対する面倒くささではないかと思われる。写真集の場合は、既にある程度見られるものが選別してあるであろうし、一覧性が高く見るスピードを自分でコントロールできる。それに対し無編集の録画中継映像は、基本的にはダラダラと見続けなくてはならない。どの時間帯にどのようなシーンがあることが明確にわかり、またそのシーンへ簡単に移動ができるなら録画の視聴ももっと気軽にできるかもしれないが、少なくとも USTREAM においてその作業は煩雑である。録画の編集においては、既存の DVD 制作業者に任せた方が良いと思われる。

今回提案したブライダル中継サービスは、地方においてこそ需要があるのではないかと考える。それは「1.4 地域の特性」で述べたことであるが、地方の人材は地元だけではなく各大都市圏などに移動している可能性が高いことと、その逆に首都圏ではその移動が少ないからである。地域活性化が叫ばれる中、結婚式などを出身の地元で開くことで地元への還元をし、遠隔会場を大都市圏で行う際に地元の物産を効果的に利用することで、その地域のファンを一人でも増やすことができれば、地域の活性化に少し近づくのではないかとと思われる。この提案は単にブライダルでの問題を解決するためのサービスではなく、地域活性化にもつながるものである。

謝辞

急な依頼にもかかわらず現地での撮影に協力してくれた宮崎顕嗣氏、遠隔会場を管理・運営してくれた大野智裕氏、武本恭介氏に感謝の意を表

します。

参考文献

- USTREAM Asia (2011)「お知らせ」民主党代表選挙の延べ視聴者数が 100 万人を突破 (http://ustream-asia.tv/news_20110830.html)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2007)「第 6 回人口移動調査」 (<http://www.ipss.go.jp/ps-idou/j/migration/m06/gaiyo.pdf>)